

田澤先生を偲んで

坂口博規

三月十九日に田澤先生の訃報に接した。一月十八日に片山先生と東戸塚の病院へお見舞に行つて、元気な御姿を目にし、また御退院されて後も新年度の授業の準備に入られている等お聞きし安堵していたので、驚くばかりであった。実は、翌日から広島市で教え子の結婚式があり、祝辞を述べることになっていたので、祝儀と不祝儀の重なりにとまどつた。何人かの方に相談、十九日夜、六時すぎ、田澤先生のお宅へ弔問にお伺いし、非礼をお詫びして、翌日広島に向かつた（今年はどういうことか、田澤先生も含め五人の方の死の報に接し、全て仕事や不在のために通夜や告別式に参列出来なかつた）。

私が田澤先生と初めてお会いしたのは昭和五十三年か五

十四年の正月、ある方の家での年始の席だつたと思う。苦小牧駒澤短大の田澤先生だと、亡き鈴木儀一先生にご紹介を得たと記憶している。私が五十五年に岩見沢駒澤短大に赴任して、苦小牧に足を向ける機会がないままご挨拶せずにいたが、そのうち田澤先生が東京の短大に移籍され、再びお目にかかつたのは、私が東京へ学会出張で出てきて、会場の早稲田大学の前で偶然お会いした時だつた。先年のつかの間の出会いを先生はよく覚えていて下さり、まるで日頃接する知己であるかのように親しく御挨拶いただいたのを覚えている。「北海道の暮らしは大変でしょう」とおっしゃつたと思う。岩見沢と苦小牧と離れていても同じ北海道、御自身の御体験を思い出され、あるいは本当に「仲間」

と思われ、優しく言葉をおかけ頂いたのかも知れない。私が平成元年東京の短大に移籍してきて、田澤先生と職場を同じくさせていただいたが、それまでたった二度の出会いでしかなかったのに、やはり以前からの親しい「仲間」のように迎えて下さった。

田澤先生と一層親しくお付き合いするようになったのは、私が平成二年九月に逗子に引っ越し、東戸塚にお住まいの田澤先生と東横線・横須賀線と同乗することになったからである。一緒に帰るのが毎日ということもあったし、どちらかが会議や、あるいは調べ物で遅くなる時などは、「今日はこれこれの用事で」と声を掛け合い、「お先に」など挨拶を交わして帰るようになった。道々、仕事の話、文学の話、御趣味の美術館・博物館廻りの話等々お聞きした。お話し好きの方だったと思う。唐木順三氏の研究を進めていらして、私が西行を研究しているので、唐木氏の西行論をどう思うかと聞かれたこともあった。

東急コーチと称するバスで自由が丘へ出るが、一緒の時は必ずといってよいほど、喫茶店に寄り、先生は紅茶、私

はコーヒーで、ケーキを食べて帰った。酒飲みの私に、お辛そうに「一緒にお酒のお付き合いが出来ればいいんだけどねえ、申し訳ないですね」とおっしゃって、ケーキを勧められた。私は俗にいう両刀使い、甘いものにも目がないう方で、ありがたく御馳走になった。いつだったか、「こうして帰りに喫茶店に寄るのは、授業をし、帰りバスで身体が揺られ、そのまま東横線に乗り家路につくのが疲れるからだ」とおっしゃったのを聞いた。それから、何となく先生のお疲れの姿が気になるようになっていたら、昨年暮れ御入院されることになった。御回復を願い、御退院を聞いては、また先生の幅広く中身の濃いお話をお聞きするのを楽しみにしていたのだが……。

今も私は東急コーチを利用して自由が丘へ向かう。自由が丘の駅前ロータリーに入るすぐ手前の道の「風月堂」。バスの中から店内が見える。ふと、いつもの席に田澤先生が一人座っているような気がして、覗き込むことがある。「やっぱり、いるはずないんだよなあ……」。